
DOラゴン × FYAンタジー

大口 砂夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

DOラゴン×FYアンタジー

【Nコード】

N9613H

【作者名】

大口 砂夜

【あらすじ】

主人公が2人！？波乱万丈な世界に飛ばされた2人の滅茶苦茶ストーリーです。*この小説は『ドラゴンクエスト』と『ファイナルファンタジー』の一部を利用した物語ですが、話の内容はこれらと全く関係ないものなので知らない人でも読めると思うので是非、読んでみてくださいm(_____)m

吉 - 俺が主人公！？

「スーちゃん…」

お昼ご飯…出来たから

ココに置いてくね…」。

「うん。ありがと。」

そう言つと

母親はあまり

足音を断てずに

俺の部屋の扉の前から

去っていく。

俺は堺道 秀。

(かいどう すぐる)

今年で19の18歳。

今、俺は

プーターローの訳でして…。

昼起きて、親に用意された
飯を食って

トイレと風呂以外は
めったに部屋から出ない俺。

何故こんな事に
なったかと言うと……。

まあどうでもいい
とか言わないで
聞いてくれ……。

俺は中学の時から
成績優秀だし
運動神経も悪くなかった。

先生からもよく
誉められてた。

顔もどつちかと言うと……。

自分で言うのも何だが

イケ……メンだと思う。
／／／……。

だって

18までに10回以上
告られたら
誰だって自信持つだろ？

まあそれはいいとして。

そんな俺は
地元でも賢くて有名な
公立高校に入学。

その学校に入ってからだ。
俺の人生が狂ったのは。

っというか
俺の思い通りに
いかなかったのは…。
の方が正しいか？

まあ、とにかく
中学と同じようには
いかなかった…。

成績は下から
数えられるぐらいになり。

進級ギリギリの状態。

何とか3年に

上がったのは良いが

受験は全て失敗。

就職なんて

する気も無かったし

するだろうとも

思ってもいなかったし。

そんな俺は勿論

ニートみたいにな

なっちゃう訳で…。

ってか

もう立派なニートだ。

さっきのは

俺もまだニートは

社会的にも悪いと

少しは思っているんだ

という主張だよ？（笑）

そんな俺は
部屋では基本
ゲームをしてる。

特に
『ドラゴンクエスト』だ。

このゲームは
神ゲーだな。

小学校の頃から
毎日、DQをやっていた。

新しいシリーズが
発売される度に
ソッコーで全クリして

俺のDQ攻略ページに投稿。

その攻略を見て
感想を言われると

俺も達成感がわく。

別に感想が聞きたいから
DQをやるわけではないよ？

『ホントにマヂで
スッゲー好きな
ゲームなんだ…。』

そんな事を思いながら
パソコンを見ながら
昼飯を食っていると

俺の部屋に向かって
階段を歩く足音が
聞こえてきた。

俺が住んでる家は
変わっついていて

二階には二部屋しかない。

一つは物置に使われ

2つ目の部屋が
俺の部屋。

この家で
物置を使うからの理由では
階段を使うのは
めったにない。

だから俺に用があるんだな
っとすぐ分かる。

これは親と暮らしている
俺にとって結構
便利なんだぜ？

何故かって？

…別に言わなくても
分かるだろ？

そんなこんなで
母親が俺の部屋を
「コンコン」っと叩く。

ほら、やっぱり俺宛だ。

「スーちゃん。

スーちゃん宛に手紙が

来てたんだけど…

送り主が解らないの…。

でも一応スーちゃん宛

みたいだから渡しとくね。」

つと言つて

よく見る封筒を

扉の隙間から出して

足音をあまり断てずに

去っていった。

つてか

送り主が解らないとか

俺宛なんだから

関係ないじゃん。

すぐ渡せよ。

まあこんな過保護な親だから

俺も二ートに
なりやすかったんだ。

いや…まあ…。

別に親のせいで
こうなったとは言わねえよ？

俺が悪いんだ…。

取り敢えず

昼飯を腹に詰め込んで

封筒を試してみる。

中身を見ると

白い封筒とあまり変わらない
大きさの紙が一枚…。

それには

『あなたは今日から
主人公です。』

オメデトウゴザイマス。
つと書かれてあつた。』

何だ？この文は？
意味わかんねえ。

まず主人公とか
言われても
何の主人公か
わかんねえよ。

この社会の？
この世界の？
それとも…。

何だ？
この現実離れた手紙は？

俺はイタズラかな？
つと思ひ封筒ごと
ゴミ箱へ投げ捨てた。

だがクシャクシャにした
封筒と紙は
見事ゴミ箱の淵に命中。

それはゴミ箱から
逃げるように
ベッドの下に
転がって行った。

俺はそのゴミを
いちいち取りに行くこと自体
めんどくさいので

さっきパソコンで見っていた
俺のホームページに

今あった事を
書き込みした。

式 - 夢なのか…？

「ふあゝあ」

不覚にもパソコンを見ながら
あくびをする俺。

時間を確認すると
もう12時に
なろうとしていた。

そろそろ風呂に入らないと
親に迷惑なので
部屋を出ようとする。

あれから俺は
椅子に座りっぱなし。

パソコンに依存しているな…。

あっ！

あれからってのは
イタズラだと思われる
封筒が届いてからのこと。

トイレは？

っもおもった奴も
いると思うが

まあそんな小さい事
気にすんなよ。

いちいち

トイレのカウントは
しねえよ(笑)。

んで俺は部屋から
出ようとする。

おっと、

部屋の電気を
消すのを忘れてた。

「カチッ」

っと電気を消すスイッチを押す。

「!？」

電気を消したら

俺のベッドの下が

何やら光っている？

眩しい光と言うより

モヤモヤと奇妙な青い光。

その光が気になって

ベッドの下を覗いてみる。

「何だ…？コレ？」

それを見た光景は凄く

神秘的だ…。

まるで小さな宇宙が

俺のベッドの下に広がっていた。

俺は不思議な気持ちになって

頭だけベッドの下に
突っ込んだ。

それは覗いて見た時とは
比べ物にならないくらい
神秘的だった…。

そんな不思議な光を
ポーっと見ていた俺は

もう結構時間が経った事に気づく。

「やべー！」

っと言って勢いよく
立ち上がるつもりだったが

頭をベッドの下に
突っ込んでいたことを
忘れてたいたので

「ドンっ！…！」

っ頭をベッドに打ち付け
俺の意識は遠退いていく。

。

光が眩しい…。

朝の日差しだろうか…。

とにかく眩しい。

そういえば俺…
ベッドの下が凄く綺麗で…。

んでボーっとしてたら
時間が経っていて…

急いで風呂に行こうとしたら…

そうだ…。
頭打って気絶したんだ…。

恥ずかし…。

そんな事を思っていたら
目が馴れてきた。

「!？」

ココは何処だ…？

俺…部屋にいたよな…？

ってか

こんな場所知らねえよ。

夢…なのか…？

そんな事を思わせた景色は
普通のビルよりも高い
木々が広がっていて

遠くは暗くて見えない…。

樹海……だ。

俺が倒れていた所だけ
光が当たり、
黄緑の草が生えている。

怖い…。

右手で左腕を掴む…。

感覚があった。

夢じゃ無いのか？

急に寒くなってきた。

それは無理もない…。

プリントTシャツ一枚に
ジーパン……。素足…。

暗闇の向こうから
スースーと吹いてくる風は
恐怖にしかならなかった。

俺は捨てられたのか？

そう思うと泣けてきた。

捨てられても

しょーがないと思える
理由があつたから。

俺の眼から出る涙に
俺の人生において
泣くことは
全然無かつたため

俺は今…
本当に悲しいんだ…。

つと余計に実感がわく。

数分間、涙を流していると

「いたぞ！」

あの方がきつとそうだ。」

つと叫び声が聞こえた。

人の声が聞こえた…。

やった…助かる…。

助かる…のか??

そんな保証は無いぞ…。

こんな知らない場所で…。

まあとにかく

ここで飢え死ぬより

可能性がある方がマシだ。

つと思ひ…

「助けてくれー」

つと叫ぶ。

すると

段々、さっきの声の主が
現れる…。

俺はもう一度

「助けてくれー」っと言った。

しかし段々と現れる

その姿はどこか

ファンタジーを感じさせる姿で

しかも

馬に乗っている…？

この時代に…
この樹海に…

馬？

マントをヒラヒラおかせて
やってきた男は

「我が国を…
我が国を助けて下さい！」

つと俺に向かって叫んだ。

「!？」

俺は

「助けてあげよう」と
聞き間違えたと思い

「助けてくれるんですか？」
つと再度確認をとる。

すると

「何を言ってるんですか！
あなたは我が国を助けて
下さる為に来たのでは？」
つと言った。

「はあ!？」

俺は何故この男に

助けを求められてるのか
意味が解らないので
取り敢えず

「貴方の名前は…？」

つと

話題を変えてみた。

「私はワルトⅡワグナーと申します。」

はい？

今なんと？

名前を聞く限り
漢字に出来ませんが？

えーと…異国の人ですか？

もう頭は混乱状態だ。

「とにかく！
早く我が国に来てください！
国王がお待ちしております。」

あー！。あー！。
俺の頭をおかしくするのは
止めてくれ。

今変な単語が
聞こえましたか？

「え〜と…国王とは？」

一応訪ねてみよう。

「何を言っているのですか！
我が国…『アリス』の
国王の事ですよ！？」

あつすいません。
そうですよね。

アリスの国王に
決まって…って…

ありえねえええ！！

つまりは…アレか？

昨日貰った封筒は

マヂで俺が主人公になる事を

報告する通知で…

ベッドの下に出来た

奇妙な光で俺はワープ

って事か！?!？

いきなり

現実逃避をするには

完璧な要素が

揃っている展開に

整理をするのは

時間がかかった…。

これは…現実なのか？

現実なら嬉しい…。
俺は主人公になれた…。

ここで第二の人生が
創れるかもしれない希望。
そんな事を思っていた時。

「ゆ…勇者様？」

ほら。
勇者様？だって

やっぱ俺は
主人公なんだよ。

「えっ？いやあ…はい…
何でしょう？」

つと俺は訪ねる。

「何でしょう？」

「じゃ無いでしょう？」

「とにかくアリスに

来てくれますでしょうか？」

俺はその質問に

「ああ。」

「と返事をした。」

参 - 無理です

俺は今

ワルトと言う男の後ろで
馬に乗っている…。

股が痛い…。

そんな事を思っていると
樹海を抜けた。

真っ暗な樹海から
俺は抜ける事が出来た。

ワルトはどーやって
アリスと呼ばれる国の
方角が分かるのだろうか？
まあいい…。

とにかく

あの暗闇から脱出出来たのだ。

樹海を抜けた時
少し眩しかったが

目が慣れて

見えた世界は

綺麗な草原が
広がっていた。

そしてその草原の向こうには

海とでかい街。

海は街の向こうと隣接していて

この樹海は

街からすると

裏にあたるのだろうか…。

きつとあの街がアリスだ…。

その街の真ん中に

遠くから見ても

立派な城があった。

だが
不安でたまらない。

俺は今から

この国を助けるのか…。

助けると言っても

それは様々だ…。

そう思いながら

景色を見つめていた。

街の近くまでくると

門番らしき兵士2人
に止められる。

「ワルト様！」

無事、勇者様を
見つけることが
出来たんですね！」

そう言って
兵士2人は喜ぶ。

ワルト

「ああ。

一刻も早く、国王様に
お知らせせねば。」

そう言って
ワルトと俺は
門をくぐり抜け

街に入る。

「さあ、勇者様。
着きましたぞ。

ここが我が国のアリスです。」

街に入ってから
馬はパカパカと
ゆっくり歩き

俺は周りを見渡す…。

綺麗な城下町…

街には人がたくさんいて
容姿はどことなく
ファンタジーを
感じさせる姿だ。

Tシャツにジーパンに
裸足…。

これじゃあ
勇者に見えないよ…。

「勇者様。
ここが我が国の城です。」

そう言われて
ワルトの視線を追って見ると
やっぱり
遠くで見るのとは
迫力が違うことが
実感させられる。

綺麗な城だが
何か迫力のある
シンメトリーの城。

城門の前で

俺はやっと
馬から降りることができた。

「この門を真っ直ぐ歩いて
階段を登った部屋に
国王がいます。」

その言葉から
俺は1人で

国王と会うのか？

っと思い

流石にこの容姿で
入るのはキツイ訳で…。

しかも

勘違いされたら
困ったもんじゃない。

「ワルトは
着いてきてくれないの？」
と訪ねる。

「私ごときが
勇者様と肩を並べて
国王様とご対面するなどは…。」

なんとなく
ワルトと国王の
地位の差がわかったが

「是非、お前も
着いてきてくれないか？」
とお願ひする。

つてか

着いてきてくれないと困る。

「はは。勇者様の
願ひならば…。」

つと

あっさり了承してくれた。

安心した俺は
ワルトと城門をくぐる。

中に入ると
レッドカーペットが
階段に向かって
敷いてあり

シャンデリアが
幾つもあった

そこは
豪華すぎるものだった。

ワルトも緊張しているのか
足どりが悪い…。

階段を登ると
両サイドに噴水があり

一階には負けない
華やかな所だ。

階段を上がって目の前には
大きな椅子が2つあり

左の椅子は空席で
右の椅子に
立派な髭を生やした
いかにも国王を感じさせる
人がいた。

その隣には
大臣だろうか？

国王より歳を
とっていそうな人がいた。

「やっと来たか…。
待ちわびたぞ。」

つと国王らしき人が言う。

「はは。国王様。
遅れて申し訳ありません。」
つとワルトが言う。

これでこの人が
国王確定。

俺はワルトと同じく
ぺこりとお辞儀をした。

「うむ。勇者を無事
連れてきたのには礼を言う。」

しかし、勇者以外
ここに入って良いと
言った覚えが無いのだが？」

何故、ワルトが
入ったらいけないのか
疑問に感じたが
この状態は俺が作ったので。

「あの…国王様。
私が心細いので
着いてくるよう
お願いしたのですが

いけませんでした？」
つとワルトを庇う。

「まあ、そちが頼んだなら
仕方がない…。
しかし今から話す事は
出来るだけ知られたくない…。

ご退席願うが
よろしいかな？」

つと国王の顔が
少し和らぐ。

すると

ワルトはすぐさま

一礼をして

階段を降りていった。

1人かよ…。

「導かれし勇者よ。

ここアリスへようこそ。

まだよくわからんことも
あるであろうが

この話しが終わったら

この城の地下に住んでいる

占いババに聞いたらよい。」

占いババ…

名前だけでも

知性を感じる名だ。

「あの…ホントに
何も知らないで
ここに来ちゃった…ってか
来ていたんですけど…」

一体何をすれば
この国は助かるのでしょうか？」

いきなりの
ストレートな質問…。

とにかく俺は
ここで何をすれば良いか
知りたかった。

「国…というか
お主には世界を助ける事
になるのだが…。」

少し問題が出来てのう…。」

「問題？」

俺じゃダメなのか…？

「実は…勇者が2人…
いてのう…。」

2人？

俺以外にも勇者が
いるってのか？

それって主人公も2人
ってこと？

とにかく『仲間』
なら有難い。

「勇者綾那よ。
入るがよい。」

だが国王は『勇者』と
言った。

「はい。」って言って

俺の立っている

左の扉から

綾那と呼ばれる女の子が
入ってきた。

女の子…？

つてか結構可愛いかも。

肩より少し長めの黒髪。

目が大きくて

顔が整っている。

俺のタイプかも…。

「私、足立 綾那と

（あだち あやな）

申します…。

よろしくおねがいします…。」

俺も自己紹介をする。

そんな

小さく喋るのも

可愛いなあ

っと思っていると

「それでは本題に入るが。
つと国王が言う。」

そう。

俺：いや、俺達が
この国を助ける方法。

緊張感が走る。

「君たちには 。
」

「無理です。
」
「嫌です!。
」

つとその国王の願いを
俺と綾那は
ソッコー拒否した。

肆 - 私が主人公!?

「ねえ君い〜。」

そんなこと言わないで

話だけでも聞いてくれよ。」

つと

ワックスで頭が

ツンツンのチャライ人が

私に向かって言ってくる。

「私に構わないで下さい!」

私は小走りで

駅へ向かう。

はあ…。

どーして私に

声を掛けるんだろ…?」

どーもリアルな

男の人は苦手だ。

特にさっきの用な人は。

電車から降りるとホッとする。

この駅に降りる人は少ないし
なにより静かだ。

今は高校3年生。

私が通う通学路は
人混みが多くて
高校生になってから
人見知りが激しく
なったような気がする…。

「ただいまあ。」

「アラ？おかえり。
遅かったのね。」

そー言つて
お母さんは視線を
テレビの方へ戻す。

「うん…。」

ちよっとクラブが長引いて。」

お母さんは私を無視して
テレビを見ている。

私はやっぱり
どーでもいい存在なんだ。

お父さんはいない。

私がまだ産まれてすぐに
ガンで亡くなつたらしい。
それからかは知らないが

私の記憶にある
お母さんは私に対して
凄く冷たい…。

無理やり話しかけても

「なんなの？
気持ち悪い子ね…。」

つと私を拒否する。

こんな家庭は嫌い…。
私が何したって言うの？

はあ…
死んだら全部
楽になれるのかなあ…？

コレも何度
思ったことか…。

でも私にそんな勇氣は無い。

だけどそんな私にも
癒してくれる物がある。

それは『ゲーム』

ゲームと言っても
テレビゲームがほとんど。

普通、女の子は
ゲームしないだろ？
つとと言う人もいるけど
それは違う…。

別に女の子だって
ゲームにハマる。

そのゲームの中でも
『ファイナルファンタジー』
が一番好き。

特にFFのヒロインが
大のお気に入り…。

FFの中でも
ヒロインがない作品も
あるけど…

その作品でも
私の勝手なイメージで
ヒロインを作り出して

話を進める…。

あんな世界に
行ってみたいな…。

早く部屋に戻って
FFをしたいので

テーブルの上に置いてある
ラッピングされた
食べ物を電子レンジで温め
急いで食べて
部屋に戻る。

「…??？」

部屋のドアを開けると
すぐ下に封筒が
落ちていた。

多分、お母さんが
置いたのかな…。

お母さんは私宛の手紙などは私の部屋に放るから…。

封筒を見ると
送り主がわからない。

誰からだろ？
っと思っ、とりあえず
封筒の中を見る。

すると封筒とあまり
変わらない大きさの
紙が一枚…。

そこには

『あなたは今日から
主人公です。』

オメデトウゴザイマス。
っを書いてあった。』

何よ？コレ？。

誰かのイタズラかなあ？

でも何故か私は
嬉しかった。

別に何の主人公がいい
とかじゃなくて

とにかく主人公に
なりたかった。

とにかく私を
構って欲しかった。

存在を認めて欲しかった。

この手紙の送り主は
私の存在を認めてくれた。

だから嬉しかった。

イタズラでも

この手紙を捨てるのは

何だか嫌だったの

勉強机の引きだしに
ソツと置いた。

.....。

ゲームしよ。

私は勉強机から
視線を外して

ゲームを始めた...

伍・夢…かなあ？

ゲームを始めてから
結構、時間が経っていた。

あっ…もうこんな時間…。

時計を見ると
もう12時に
なるうとしていた。

私はすぐお風呂に入り

部屋に戻って
学校の宿題をしようとする。

そして勉強机を
視界に入れると…

引きだしの隙間から
光が漏れている？

その光は何だか奇妙で
青白くモヤモヤと
光っていた。

私は気になって
その引きだしを開ける。

すると！
引きだしの中に
綺麗な世界が広がっていた。

凄く綺麗…。

宇宙を見てるかのようだ。

私は少し好奇心で
その引きだしに
手を突っ込んだ…。

すると！
急に光が強くなりだして
帯ただし光が
私を包み込む。

「キヤアアア!!。」

。

気が付くと木々に囲まれ
孤独に満ちた場所に
私はいた。

ココは何処？

さっきまで部屋に
いたはずなのに…。

これは…夢？

幸いにも
私だけを当てる
月光のおかげで
今、どういう状態なのか
確認する事が出来た。

寒い…。

シャツ一枚に
上下揃いのパジャマ。
裸足にスリッパ…。

暗闇の向こうから
吹いてくる冷たい風からは
私に恐怖を作り出す。

夢じゃ…ないのかな…？
夢にしては凄くリアルだ。

その時！
私の足首に
大きなムカデが

カサカサと歩いていく。

「ギャアアアア！」

嫌ああ。

虫は嫌い！

特にトゲのある虫は。

FFをしている時も

虫のモンスターが

現れた時は

全力でぶち殺していた。

私は暗闇の恐怖より

断然、ムカデの方が怖いので

スリッパで

何処に着くかもわからないのに

何があるかわからないのに

適当に真っ直ぐ走った。

ひたすら走る。

バトン部に入っていて
運動には自信のある方だ。

でも小一時間…
しかもスリッパで
走っていると

流石にしんどい。

足の動きが冷静になると
ふと気づく…

辺りが真っ暗だ…。

突然、恐怖に襲われる。

もつとつにでも
なればいい…。

死んでもいい…。

もう、前から
思っていたこと。

ただ勇気が無かっただけ。
きっかけが無かっただけ。

今なら死ねる。

そう思いながら
ペタペタ歩いてしていると
目の前が薄く光っている。

外…？

外に出られるの？

急に笑えてきた。
さっきまで死ぬと
思っていたのに

希望が見えると
今はそこに向かって
歩いている…。

神様はイジワルだ。

このタイミングで
希望を見出だしてくれる。

とにかく
私は外に向かって歩く。

段々と出口に
近づいていき
私は樹海を抜ける。

「きれい…。」

樹海を抜けると
草原が広がり

私の住んでる場所では
滅多に見られない

無数の星が見えた。

そして

向こうには

海が広がり

その海に隣接する

大きな街。

ひんやりと風が吹き

パジャマや髪がなびく。

何だか涙が出てくる。

さっきまで

暗闇に包まれていたのが

嘘のように暖かい。

体は寒いのに

心が暖かい…。

安心した。

何故、私は

ここにいるんだろ？

何のために？

その前にどーやって
ここに来たの？

安堵と同時に
様々な疑問が浮かぶ。

とにかく目の前に見える
街に行こう。

そう思い

私は足を動かした。

陸・嫌です！

「はあはあ。」

もう樹海を抜けて
どれぐらいの時間が
過ぎただろうか…。

目に街は見えるのに
中々たどり着かない。

流石に徒歩ではきついか…。

そして…
やっと辿り着いたと
思ったら

「何者！？……人？
どーやって外に…。」

つとこの街の

門番らしき人が話す。

人だ…。

何だか久しぶりに
人と会った気がする…。

それにしても
この人の容姿はおかしい…。

鉄の鎧を来ていて
今の時代に兜…？
それに槍も持っている…。

本当にココは
何処だろう？

何か、科学では
説明出来ないことが
私の部屋に起きて
私は今よくわからない時代の
よくわからない場所にいる…
ってこと？

などと無理やり
状況を理解しようとしてみたり…。

「こんな時間に
そんな変な格好で
外を歩いてよいと
思っているのか？
早く街へ戻りなさい！」

つと
門を開けてくれた…。

私はペコリとお辞儀をして
小走りで門をくぐった。

門を抜けると
暗くてよく見えないが

『アリス』

つと大きな看板が見えた。

この街はアリスと
言うのだろうか？

それにしても暗い。
人の気配が全然しない。

まあこの時間だし
しょうがないけど…

帰る場所も無いし
どーやって帰るかも
わからない私は
とりあえず

この街が囲んでいる
立派な城を目指すことにした。

城だけは
門の周りにランプが
着いてあり

少し明るさが
灯っていたため
すぐに辿り着くことが出来た。

城に着くと
城に入るための
掛橋？のようなものが
閉じてあった。

ヤバイ…。

万事休すと思ったが
よく見ると

城の周りの溝に
水がひいて無かった。

これじゃあ

掛橋を作る意味が無いのでは？
っと思っただが

コレはチャンスだと思い
スリッパを汚しながらも
溝に降りて

そしてまた上がり
城の入り口に辿り着いた。

中に入ると

明かりは無いが
かなり広いと思える程だ。

とりあえず
人を探そうとする。

すると

「ガシッガシッ」と

さつき門番で見かけた
ような人が
城を見回りに来た…。

流石に

アレには話しにくいので
逃げようとするが

「誰だ！」

っと気配を感じられた。

私は周りを見て
地下に続く階段を
見つけたので

足音を断てずに
階段を降りた。

少し長い階段を降りると
明かりが見えてきた。

その明かりが漏れている
扉をゆつくりと開けると
水晶を見つめ
いかにも魔法使いを
思わせる服装の
お婆さんがいた。

「あの……。」
つと声をかけると
「ようやく来たか…勇者よ。」

つと私を見ずに
水晶を見ながら
まるでここに来ることが
分かってるような
口調で話す。

「今夜はもう遅い…。
長い距離を歩いて疲れとるじゃろ？
今日はもう休みなさい。」
「
と今度は
私の目を見て話す。

何だろう？

さっきから私のことを

『勇者』と言っ…。

勇者って

普通、男の子じゃないの？

ってか

勇者とかいると思ってるの？

思いきってお婆さんに

「あの…さっきから私が
勇者みたいに話すの
やめてくれませんか…？」

と舐められてたら
困るので一応断っておく。

「何を言っておるんじゃ！
お主はこの国を…
いや世界を救う勇者じゃぞ？
自分に自信を持ちなさい。」

「！？」

何を言っているか
わからない…。

私が勇者？

でもお婆さんの態度を
見る限り冗談を
言っているようには
見えない…。

もしかして…
私に届いた封筒が
関係してたりして…。

もし関係しているならば

私は主人公？

そして皆から注目を浴びる…。

何不自由の無い生活を送り

愛のある家庭を気付くの…。

いつの間にか

妄想世界に

入り込んでいた。

「だが、困ったものじゃ…

一応、神のお告げの通り

城の溝の水を

今夜だけ抜いておいたが…

やはり今回の勇者は

2人もいるのか…。」

つとお婆さんは呟く。

えっ？

2人？今回も？

頭が『？』で
いっぱいになった。

「ちよつと待つとれ」

つと言われ

お婆さんは階段を
上がっていった…。

私はお婆さんの
座っていた椅子に座り
コレからの
不安でいっぱいだった。

数分経つと

お婆さんが戻ってきて

「着いてこい。

王様の所まで案内しよう。」

つと扉を開けて

また階段を上っていった。

王様？

この時代に？

私はお婆さんに
着いていく…。

階段を2回上がると
そこは豪華で
綺麗な場所だった。

目の前には
王様らしき人が
眠そうに座っている。

「この子が勇者じゃ。」

つとお婆さんは
王様の耳元で呟く。

「本当に勇者なのか…
1日早くに来るなど信じられん…

異例中の異例だぞ。」
つと気分を悪くして言う。

「あの…よかつたら

私の家に帰る方法を
教えて欲しいなあ…なんて」

「何を言っておるんじゃ！

お主は神から勇者と

認められたから

この世界で1つしかない

楽園の国アリスに

別世界から来たんじゃないか！」

つとお婆さんは

焦りながら私に言う。

別世界？

えっ？どーゆうこと？

「帰れないんですか？」

つと私は不安そうに訪ねる。

「お主が世界を救えたら
帰れるさ。」

つとお婆さんは言う。

救う？何を？

「私、別に勇者とかじゃ
無いですし！
関係無い人にいきなり
救ってくれとかを
言うのって間違ってる
と思います！！」

つい思ったことを
言ってしまった…。

でも王様は…笑ってる？

「ハハハ。
気に入ったよ。
確かに私も昔からそれは
思っていたことだ。」

だが世界を救えるのは
昔より勇者だけと
決まっただけ…。

私の代で勇者じゃなくても
救えるのじゃないか？
と色々試したのだが

やっぱり駄目でね。
どーしても君に
やってほしいんだよ。」

王様は私の目を見て
力強く話した。

私じゃないと出来ない…。

それを言われた時
ドキツとした。

「とにかく明日に
君と同じ勇者が現れる
予定だから君は
この隣の部屋で
勇者が来るまで
休んでてくれないか？」

もう1人勇者が？

「勇者は複数
いるのですか？」

つと私は尋ねた。

「いやあ。本来ならば
毎回、勇者が1人
平和な別世界から
この世界にやって来て

そして勇者が死んで
ちよつど次の年に
また1人勇者が来る…。

つという感じなんだが…
今日はまだ一年経つてない…。
占いババの言う通り
今回は本当に二人のようだ。」

つと困つた顔をする。

「そうなんですか…。」

私は間違つて
この世界に来たんだらうか？
とにかく早く
家に帰りたい。

いや、帰りたいというより
このおかしな世界から

元の世界に戻りたい…。

そう思った。

その話の後

私は部屋を案内され
ぐっすり眠った……。

翌日。

メイドさんに起こされると

「おめでとございます。」

先程、勇者様が

お見えになられたそうですよ。」

つと言ってきた。

不安だ…。

もしかしたら

物凄く野蛮な人かもしれない。

別世界から来ると
言っていたから
私の住んでる世界から
来るとは限らない…よね？

そんな不安を抱いていると
扉の向こうから

「勇者綾那よ。
入るがよい。」

つと王様の声が
聞こえてきた。

ドクンドクンと
心臓の音がうるさい。

「はい。」

つと返事をしながら
私は扉を開ける。

すると目の前に

Tシャツ一枚に
ジーンズ。素足の…
ちよつとイケメンの人が

私の方を見ていた。

私はパジャマ…。

スリッパは土で汚れたので
寝る前にゴミ箱と
思われる箱に捨てた。

なので素足。

恥ずかしい…。

私は自己紹介をすると

「俺は界道 秀です

…よろしく。」

っと返してきた。

中々、常識がありそうだ。

秀君の顔を見ていると

「それでは本題に入るが」と王様は言う。

私は秀君から王様へと視線を替える。

何をすればいいんだろう？

緊張する…。

私は早く元の世界に戻るんだ…。

「君達には魔王『達』をやっつけてほしい。」

「！？」

今なんて？

魔王？……たち？

魔王とはRPGでは

お決まりのボスキャラで

それは戦闘ゲームであって…

頭が混乱する…。

そのパターンで来たか…。

昨日…

寝る前に色々と

世界を救う方法は

どんなのだろうか？

つと考えたが

まさか戦うとは思わなかった…。

っというか
思いたくなかった。

喧嘩もしたことのない
私に魔王を倒せというのは
無理難題だ。

王様への返事は
決まった…。

「嫌です！」

その瞬間
秀君も『嫌』と言って
私は間違っただけと

そう思えた…。

漆 - 魔王… たち？

王様は今何と…？

聞き間違いじゃないよなあ…

つてか

魔王『たち』つて
なんだよ！？

魔王つて…アレだろ？

悪い魔物を率いて
ボスを気取ってる奴だろ？

そんなのが
複数いてもいいのかよ？

とにかく…

俺は余り喧嘩とか
好きじゃないし
そりゃあ俺がもし
強かったら

いいかもしれないけど…

二トトだぜ？

そんな俺はもう
返事を決めた訳で…。

「無理です。」

そうキツパリ断った。

俺と一緒に
綾那さんも『嫌』と
言っていたし…

そりゃ当然だな…。

いくら主人公に
なれるからって

魔王…いや！

魔王達を倒すとなると
主人公なんかどーでもいい…。

つてか！

今、俺が断つた所で
どーなるんだ？

ちゃんと俺のいた世界に
戻れるのか？

「やはり毎度のこと
断わるか…。」

つと王様は言う。

当たり前じゃん。
誰がやるんだよ（笑）

「しかし、お主達は
まだ気がついていないが
勇者になると
ある特別な力が宿る。

勇者の力は毎回それは様々だ。」

力？

そんなの俺だって
あるんなら使ってるよ。

「あの…力って
どーやって使うんですか？」

おっ！綾那さん、いい質問だ。

確かにあるなら聞いてみたい。

「使い方も毎回勇者によって違う。

詳しくは占いババに
聞いてくれ…

とにかく、お主達には
世界を助けて貰わねば
いかなのじゃ…。

勝手なのはわかつとる…。

だが、コレはお主達にも
関わることで
魔王が滅びぬ限り
お主達は元のいた世界に
帰れぬのだぞ？」

「えっ…??」

それを聞いた瞬間
絶望を感じた…。

俺は20になるまでに
死ぬのか…。

「あの…。私、とりあえず
やってみます！」

は？綾那さん
とりあえずとか
何言っちゃってんの？

魔王だよ？
魔王を倒すんだよ？

「ねっ。秀君…
頑張ろ！頑張つて
元の世界に戻る！」

やめてくれ…。

綾那さんには恐怖が
無いのか？

いや。

綾那さんは震えている…。
でも戻りたいんだ…。

強いな…この子は。

そんな子の願いを
壊すことは出来ない訳で…。

「…俺。やってみる。
やってみるよ。」

言っちゃった…。

もうどうにでもなれよ…。

「うむ。決死の決断を
してくれたことに
誠に感謝する。」

それでは占いババの
話が終わったら
もう一度ここに来てくれ。」

そう言うと
王様の隣にいたお爺さんが
占いババの居場所まで
案内してくれた…。

扉を開けると
そこには魔法使いの
お婆さんを感じさせる人がいた。

「2人とも…よく来たな。
もうすでに綾那は
聞いておるが今回の
勇者は2人じゃ…。」

これは異例じゃ。」

すでに聞いている？
確かに俺が来る前から
ここにいたけど…

どれくらい

この世界にいるのだろうか。

「それとお主達には
勇者の義を終えた後

異界の扉へと行つて
魔王に支配されている
様々な世界に行つて
その魔王を倒してきてほしい。

異界の扉からは
どんな世界に行くかは
わからぬ…
もしかしたら
最弱の魔王がいる世界
かもしれんし
最強の魔王がいる世界
かもしれん。

それは本当に様々じゃ。

魔王がいなくなると

異界の扉は閉まり
全ての世界は
平和で溢れるじゃろう。

今のこと

ここ数1000年の間に
3体もの魔王を
倒したが…

まだ異界の扉が閉まらない。

最近の勇者は
すぐ死んでしまう…。

お主達も気を付けるんじゃぞ。」

はい？
そんなこといきなり
言われましても…。

つてか1000年で
3体って少な！

後、何体いるんだよ？

はあ…

死亡確定。

「まあ時間はたっぷりある。

お主達は神のご加護で

年はとらないし

病気にもならない。

体が朽ちるまで

お主達は死なないのじゃ。」

うっそ！？

マジで？

それってまだ

チャンスがあるじゃん。

いや。待てよ…？

このままこの街で

ずっと暮らすってのも

悪くないな…。

「年がとらないんだ…。

それなら尚更

早く魔王倒さなくちゃ！

私がここで呑気にしてる間に
私の世界にいる人は
どんどん年をとっていく…。
そんなの嫌！！

秀君…2人で力を合わせたら
きっと勝てるよね？」

えっ？

まちか！！

本気かよ……。

まあ確かに

万が一帰れたとして

もうその頃は

皆、死んでるなんてことは
嫌だけどさあ…。

「あ……ああ。」

っと自信なさげに
俺は返事をする。

「そっじゃー！

今回は2人いるのじゃ。

このチャンスを
逃さない訳にはいかん。

是非とも魔王を倒してくれ。」

でも…

どーやって魔王なんか
倒すんだよ？

特別な力って言っても
実際に何も出来ないし。

「あの…勇者の力って
どーやって使うんですか？」

綾那さんもやはり
気になるか…。

「うむ…。私にも
まだ確信は得てないのじゃが
どうやらその勇者の
一番想像しやすい力が

勇者の力として
具現化するようじゃ…。

しかし、大きすぎる力は
すぐには使えん…。

地道に魔物を倒して
使えるようになっていくのじゃ。」

一番想像しやすい力…。

やっぱりDQだな。
DQのだいたいの技は
覚えているし
イメージもしやすい。

だからといって
本当に使えるのか…？

「説明が終わった所で
お主達にはさっそく
勇者の義をやってもらう。」

そーいえば
さっきそんな単語が
出ていたな…。

「勇者の義って？」

「勇者の義とは
お主達が魔王がいる世界に
行けるかどうかを
調べる儀式じゃ。」

だが最近はこの儀式で
死ぬ勇者も少なくなはない。
気を引きしめて
やるんじゃぞ？」

はっ？

死ぬかもしれないの？

そんな危険な儀式が
あんのかよ？

いきなりピンチだ…。

とにかく綾那さんを
何とか励まさないと…。

そう思い綾那さんを見ると
何か自信がある？のか
恐怖は感じていないようだった。

「それじゃあ
国王のいた場所へ
戻りなさい…。」

そう言われて
今回は2人で王様の場所へと向かう。

「あの…秀君の
イメージしやすい力って
何かな？」

いきなりの質問に焦った。

「えっ？…ゲームかな…。」

恥ずかしい…。
今から死ぬかもしれないのに
ゲームだってさ…。

「あつ！一緒だ。」

へっ？

「私もゲームがイメージしやすいの…。」

特にファイナルファンタジー。」

ファイナルファンタジー。

俺も一回、友達が

やっているから

という理由だけで

やったことがあるが

どうも難しい。

綾那さんもゲームやるんだ。

「秀君は何のゲーム？」

「お…。俺はドラクエ…。」
子供っぽいかな…？

「ドラゴンクエストね！
やったこと無いけど
今の状況にピッタリね。」
そう言っただけに微笑む。

確かにピッタリかもしれない。

DQも基本
魔王を倒すゲーム…。

あれ？FFも
そうじゃなかったっけ？

などと思っていると
さっきの場所に辿り着いていた。

「どうぞやら占いババの
説明は終わったようじゃな。

それでは私に着いてこい。」

そういって
王様は重い腰を上げて

この部屋に入って
右にある噴水に向かって
祈りだす。

すると噴水の水は
どンドンひいていき

奇妙な渦が現れる。

あの時と一緒にだ…。
俺のベッドの下に出来たもの。

アレと重なる。

「さあ。ここに入って
魔物を倒してくるんだ。

無事を祈っている。」

そう言うと
王様は目を瞑った。

俺は綾那さんを見た…。

その時

綾那さんと目が合い

何故か不思議と

恐怖心もなく

その奇妙な光に

足を運ぶ事が出来た。

捌 - 勇者の力

ピカーー!!

つと

噴水だったその場所に
足をつけると
光が強く輝きだす。

「うわっ!」

「キヤア!」

俺がベッドの下で
気絶したときも
こんな輝きを
放ったのだろうか。

お互いに驚きながら
意識が遠退いていく。

「く…ん。」

「秀…君…。」

「起きて！秀君！」

「うっ…うん。」

目を開けると

綾那さんが俺を見ていた。

「えっ？あっ！

…「コは…どこ？」

取り敢えず焦ったが

このままじゃ

気まづいので

率直に感じたことを

質問する。

「わかんないよー。
私もさつき起きたばっかで
前にこういうこと
一度体験してるから
怖くて…周りを見たら
秀君が寝ていて…。」

体験している？

周りを見渡すと
俺がこの世界に来た時と
重なった。

目が覚めると
俺を当てる光。

周りには木々があつて
奥は暗くて見えない。

ただ違うのは
隣に綾那さんがいること。

綾那さんも
俺みたいな感じで
この世界に来たのだろうか？

「あああー！」

いきなり綾那さんが
大声を出したので俺は
ビクッ！
つとなる。

「私達…服そのまんまだ。」

「!？」

そういえば!!

普通、戦闘するなら
防具か武器ぐらい
用意するだろ!？

マチか!？

ヤバくないか!？

その瞬間！！

カサカサと草が
激しく揺れだした。

「えっ？なに？」

綾那さんが周りを見渡す。

取り敢えず立つてみる。

まだ草の揺れが
止まらない。

「えっ？どーなってんの？」

綾那さんがそう言った瞬間。

地面から半透明の
青い液体が浮き出てきて
口？だろうか
目が無くて口を大きく開けて
俺達の前に現れた。

「俺…知ってるよ…。」

「私も…。」

唾を飲んだ。

「スラ…イムだよね？」

「多分…。」

初めて出てくる
定番の魔物で
あの可愛らしい？」

いや！

見た目はどーみても
気持ち悪い。

何だかブヨブヨしてて
高さも俺ぐらいあって

例えるなら

人間と同じ大きさの
アメーバみたいだ。

「どーしよ？秀君…。」

綾那さんが俺の後ろに下がる。

やっぱりココは

男が先なのね…。

取り敢えず占いババの

言っていたことを

思い出してみる。

想像しやすい力…。

俺はDQが想像しやすい。

特に剣技だ。

だが剣などジーパン野郎が
持つてるハズがない。

だとしたら

『魔法』だ。

DQの魔法もある程度は…

いや、ほとんど覚えてる。
だが全ては想像出来ない。

取り敢えず…

一番記憶に残っている
魔法を口に出そう。

「メラゾーマ！」

・メラゾーマ（DQ）

メラ系最終呪文で

地面からマグマが吹き出たり
大きなマグマの球を出して
相手に投げつける呪文。

俺は手をスライムに向けて
呪文を唱えた。

だが何も起きない…。

やはり駄目なのか？

勇気を出して

羞恥心を捨てて

占いババを信じたのに…。

俺にそんな力あるわけ無い。

スライムは

頭を伸ばして

攻撃しようとする。

「どうすればいいんだよ……。」

俺は取り敢えず

手で防御の形をとる。

しかしそんなの無意味な訳で。

頭から伸びたスライムの体は

俺の足に巻き付いて

俺を持ち上げる。

「うわー！ー！！」

「秀君！」

「……ブ、ブリザド！」

・ブリザド（FF）

地面を凍らしたり

魔物の表皮を凍らす低級呪文。

綾那さんが呪文を唱えると

綾那さんの手から

光のリングが飛びだし

スライムを凍らした。

俺を掴んでいた部分は

ポロポロと砕けて

俺を解放した。

「あ…ありがと綾那さん。」

「うん。試してみたら

本当に出来ちゃった。」

確かに人間離れした事が

俺の目の前で起きた。

「何で綾那さんだけ
出来たんだろ？」

俺の想像力が足りないからか？

何だか足を引つ張っていて
気に入らない感じになる。

「多分、私達はまだ
大きい力を扱えないのよ。
ほら！占いババが
言ってたじゃない。」

あっ！

確かに言っていた…。

それじゃあ
小さい力なら？

「え〜と…ホイミ！」

・ホイミ(DQ)

低級回復呪文

多少の傷なら直ぐに回復。

さつきスライムに掴まれた
足に手を向けて唱えてみると
俺の手から光のリングが
飛び出して
足の痛みがひいていった。

「ホントだ…。」

スゲー。
魔法が使えた。

とにかく感動した。

「ほら、秀君も
使えたじゃない。」

「うん…。」

綾那さんがいて
良かったと思った。

「これからどうする？
とにかく進む？」

確かにここにいても
始まらない。

しかし進むと
また魔物と
出くわすかもしれない。

しかも俺達は裸足だ。

「靴…欲しいな…。」

「王様に頼めば良かったね…。」

だがもう来てしまっ
ては
どうしようもない。

「裸足だけど…歩こっか？」

嫌々言ってみる。

「うん…そだね…。」

綾那さんのさっきの
元気はどこへ行ったのか
物凄く落ち込んでる。

でも仕方ない…
靴なんて落ちてるハズが
ないのだから。

そして俺が
足を動かそうとした瞬間。

「あつ！良いこと考えた。」

えっ！？
良いこと？

靴が無くても歩く方法？

「秀君！そのまま動かないでね。」

俺は頷いたが
何をするんだ？

「レビデト…」

・レビデト（FF）

低空呪文

地面からの攻撃を
避けることが出来る。

レビデト？

どんな呪文だっけ？

そんなことを思っていると

綾那さんの手から光のリング
が飛び出して

俺と綾那さんの体が
少し浮いた。

「これで大丈夫だね。」

綾那さんが俺を見て笑う。

スゲー！！

こんな呪文あったんだ！。

「凄いよ綾那さん！
ありがとう。」

俺達はフワフワ浮きながら
暗闇の中に入っていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9613h/>

DOラゴン×FYAнтажー

2010年10月24日22時24分発行